OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	外来化学療法
Author(s)	金, 昇晋; 野口, 眞三郎
Citation	癌と人. 2006, 33, p. 17-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23639
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

外来化学療法

金　昇晋*・野口眞三郎*

1　はじめに

従来，抗がん剤治療（化学療法）は髪の毛が抜け，嘔吐で苦しみ，つらくしんどい治療の代表的なものでした。また，治療を受けるためには入院が必要など社会的あるいは経済的にも負担の大きい治療でした。しかし，最近，嘔吐に対する予防方法の進歩などにより，今までと比べると格段に楽に抗がん剤治療を受けることができるようになってきました。それにともない入院で行っていた抗がん剤治療を，通院で，自宅から通いながら行うようになってきました。これが外来化学療法です。

2　外来化学療法の問題点

患者さんにとって，自宅にいながらあるいは仕事をしながら抗がん剤治療を受けられることは精神的，社会的，経済的に大きなメリットがあります。しかし，治療の安全面や質に関して問題がないわけではありません。例えば，抗がん剤の投与ミスは起こらないのか，あるいは副作用が出現したときにはどのように対処するのか，入院で行うときと同じ内容の抗がん剤治療が受けられるのかというような問題です。

さらに，抗がん剤治療の中には長時間の点滴が必要なものもあります。このような治療を，従来のように，イスに座ったままや狭くて固い簡易ベットの上で受けたりすれば，それだけで患者さんは疲れてしまいます。このような問題点を解決するためには，抗がん剤治療を専門に行う施設が必要です。それが昨今，多くの病院で新設されている外来化学療法室です。

3　大阪大学医学部附属病院の外来化学療法室

大阪大学医学部附属病院にも平成15年12月に外来棟の1階に外来化学療法室が設置されました。対象は，小児以外で，抗がん剤の点滴を受ける患者さんであれば何科に罹っていても利用できます。点滴の前には必ず各診療科で診察を受けて頂き，その後に外来化学療法室で抗がん剤の点滴を行っています。部屋には液晶テレビ付きのリクライニングチェア（図1）が12台あり，3～5時間，治療法によっては8時間もかかるような抗がん剤の点滴でも，テレビをみたり，あるいは完全に横になって寝たりしながら，リラックスした環境で楽に受けて頂けるようになりました。安全性の面では，専属の医師，看護師が常勤し，治療中の患者さんの状態を管理しています。また，抗がん剤の点滴は，専属の薬剤師が医師の処方に従い正確にかつ無菌的調剤しています。以前の外来化学療法は，各診療科の外来の処置室などで，外来業務の合間に，担当医師や看護師が抗がん剤の作成から投与，投与中の管理まで行っていましたが，外来化学療法室設置の効果により，当院での外来化学療法は従来にはなかった快適さに加え，質や安全性においても入院での抗がん剤治療と全く遜色のないものにレベルアップしました。表1に外来化学療法室開設以来の利用状況を示します。

経過とともに外来化学療法室を利用される患者数は増加しており，H17年度では，1年間で延べ4908人，1日平均約20人の患者さんが外来化学療法室で抗がん剤治療を受けられています。利用している患者さんの内訳は，従来から外来で抗がん剤治療を受ける機会の多かった乳腺内分泌外科と消化器外科の患者さんが大多数を占めますが，徐々に他の診療科の患者さん，特に以前では入院でしか抗がん剤治療を行わなかった診療科の患者さんの利用も増加してきています。ま

＊大阪大学大学院医学系研究科　乳腺・内分泌外科

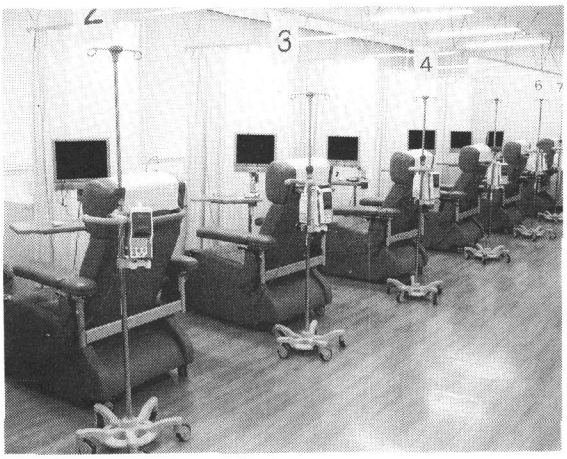

図1　外来化学療法室

た，利用している患者さんの満足度は非常に高く，当病院においてなくてはならない部門の一つとなっています。安全面でも，開設以来，抗がん剤の血管外漏出（抗がん剤が血管から周りの組織に漏れ出てしまう合併症）は，9170 件治療した中で疑わしいものを含めても僅か 11 件（0.12%）の発生頻度でした。いずれもすぐにステロイド剤の局所注射などの応急処置をとり後遺症もなく治癒しています。その他のインシデント（本来あるべき行為から逸脱した状態のことで，それによる傷害の有無や，また過失やエラーなども問わない）の発生件数も 9170 件中 17 件（0.19%）でした。この中で最も重症であったものは，抗がん剤の点滴によるアレルギー反応のためにショック状態になった患者さんを 1 例認めましたが，直ちに応急処置を行い，入院の上治療を行うことにより大事に至らずにすみました。今後も安全性の面では，常により高いレベルを目指していかなければならないと考えています。

4　おわりに

現在，癌治療において外来化学療法の充実は必要不可欠であると同時に，社会的なニーズでもあります。それに応えるべく，外来において高度で安全な抗がん剤治療を提供することは我々，癌治療に携わる医療スタッフの使命であります。H18 年 1 月には，外来化学療法室から“化学療法部”へと組織の拡充が行われました。今後，外来化学療法をより充実・発展させるためには，病院全体としてこの目標に取り組む必要があると考えています。

表1　外来化学療法室利用状況

	乳腺外科	消化器外科	呼吸器内科	婦人科	泌尿器科	血液腫瘍内科	消化器内科	脳外科	呼吸器外科	動注	合計	診療日数	患者数/日
H15年12月	91	120	6	4	5	3	0	0	0	32	261	19	13.7

	乳腺外科	消化器外科	呼吸器内科	婦人科	泌尿器科	血液腫瘍内科	消化器内科	脳外科	呼吸器外科	動注	合計	診療日数	患者数/日
H16年1月	103	126	0	4	14	21	5	0	0	52	325	19	17.1
H16年2月	87	132	11	6	22	20	16	0	0	22	316	19	16.6
H16年3月	98	123	3	10	19	29	20	0	0	68	370	23	16.1
H16年4月	121	109	9	10	15	9	22	0	0	48	343	21	16.3
H16年5月	105	93	12	3	14	11	24	0	0	37	299	18	16.6
H16年6月	111	98	11	5	25	17	29	0	0	41	337	23	15.3
H16年7月	105	101	10	9	31	13	27	0	0	39	335	21	16.0
H16年8月	96	108	4	28	22	6	4	0	0	39	307	22	14.0
H16年9月	105	119	2	14	37	9	22	4	0	32	344	22	17.2
H16年10月	111	124	11	10	37	7	11	2	2	20	335	20	16.8
H16年11月	135	107	7	9	40	8	12	5	4	26	353	20	17.7
H16年12月	133	110	5	6	33	7	9	7	7	20	337	19	17.7
合計	1310	1350	85	114	309	157	201	18	13	444	4001	247	16.2

	乳腺外科	消化器外科	呼吸器内科	婦人科	泌尿器科	血液腫瘍内科	消化器内科	脳外科	呼吸器外科	動注	合計	診療日数	患者数/日
H17年1月	129	136	10	9	34	7	6	5	5	18	359	19	18.9
H17年2月	126	125	9	17	27	4	9	12	4	21	354	19	18.6
H17年3月	158	152	5	22	31	4	8	10	9	27	426	22	19.4
H17年4月	143	137	5	21	26	11	7	11	5	13	379	20	18.7
H17年5月	140	137	3	17	35	4	8	13	3	20	380	19	20.0
H17年6月	161	119	4	18	37	5	10	10	1	21	386	22	18.1
H17年7月	176	116	8	18	31	3	10	5	3	30	400	20	20.0
H17年8月	210	128	16	15	38	19	14	4	2	26	472	23	20.5
H17年9月	217	127	18	11	33	14	22	3	5	24	474	20	23.7
H17年10月	166	115	15	14	32	18	21	2	4	11	398	20	19.9
H17年11月	168	166	17	17	28	12	20	2	10	16	456	20	22.8
H17年12月	152	155	17	8	31	6	25	2	8	20	424	19	22.3
合計	1946	1613	127	187	383	107	160	79	59	247	4908	243	20.2